

## S. W. Williams の『漢英韻府』について

塩山正純

### 前言

18世紀欧美人士在中国编纂的汉英、英汉词(字)典以马礼逊(1819)为其嚆矢,随着中外关系的逐渐扩展,此类词(字)典亦越显其重要性。卫三畏的《汉英韵府》,自1874年初版以来,到1909年修改再版了好几次,许多西洋人士乐于将它作为学习汉语的好伙伴,因此,可以说它在近代汉语研究上具有相当重要的意义。本文是对卫三畏的汉英字典《汉英韵府》的研究,通过分析该字典的前文和当时部分研究者的有关论文,以及与同期其它词典的比较对其编写上的特征进行考察。首先,介绍了编者,出版经过,字典内容等,考察了各版本之间的区别。关于该字典正文,以“说”一词条的释义为例,通过与翟理斯1892的《汉英字典》,司登得1877的《汉英合璧相连词汇》进行比较,说明其特征。其次,关于该词典选择汉字,词的标准,罗马字的发音标记,对方言的看法和释义等问题,以具体的例子,编者本人的有关文章进行了阐释。最后,关于该词典自初版至最后改订版的变化和发展,与马礼逊以来其它字典的继承关系等,从编纂史的角度进行了分析,举出其特征。当然,关于汉英、英汉词(字)典发展的整个过程,是个庞大的研究课题,今后还有待于全面深入地研究。

### 1. はじめに, S. W. Williams について

ロバート・モリソンによる『華英字典』の出版により,中国における本格的な英華・華英字典の編纂・出版の歴史が始まった。以来,それはプロテスタントの宣教師の手によって行われたが,のちに,アヘン戦争を経て中国と欧米との交流が飛躍的に拡大し,ウェードや,ステント,ジャイルズなどの外交官・海関関係者が中国語研究者として台頭するようになり,字典編纂の面でも活躍するようになった。そして,その過渡期,1874年にS. W. Williamsによって『漢英韻府』(A Syllabic Dictionary of the Chinese Language)が出版された。この辞書はのちのちまで評価が頗る高く,世紀を跨いで1909年にも版が重ねられた。1892年に,H. A. ジャイルズによる大部の華英字典(A Chinese-English Dictionary)の初版(1912年2版)が出

版されたが、それでもなおウィリアムズの辞書に軍配を上げる評価もある。

ウィリアムズ (1814-1884, S. W. Williams, 中国名は衛三畏) は、1814年ニューヨークのユーティカ生まれで、若くして印刷技術を学び、1832年に China Mission の印刷工に任命され、1833年広東に渡った。続いて東インド会社のマカオ印刷所の責任者になり、1842年には Morrison Education Society から通信書記に選任された。1844年に一時帰国し、結婚、1848年には印刷所の最高責任者として夫人をとめない再度来華した。1853年、54年に、2度にわたり、アメリカによる日本遠征に参加し、1856年、アメリカ公使館の秘書に任命され、翌年 Missionary Society との関係を破棄した。1858年の天津条約締結をはじめとして、1856年から1876年の20年間、対中外交交渉に関与した。1877年に辞職し帰国、1884年に逝去した。ウィリアムズの中国語研究業績としては、本稿で取り上げる『漢英韻府』のほか、代表的なものにさらにブリッジマンの編集を補佐した The Chinese Repository などがある<sup>1)</sup>。

## 2. その華英字典『漢英韻府』について

ウィリアムズの華英字典『漢英韻府』は、モリソン以来の旧来型の字典の伝統を受け継ぐものであり、「仕事の堅実さからいっても、Giles のものより、Williams に軍配をあげる専門家が多 (伊地智1957)」といった積極的な評価がある。ウィリアムズの華英字典はどんなものであったのか、以下、出版の経緯、構成と内容、体裁、編纂の方針とその特徴など幾つかの点についてみてみたい。

### 2-1. 出版の経緯

ここで、ウィリアムズの来華から出版までの経緯を簡単にまとめると次のようになる<sup>2)</sup>。

1833年 来華。

翌1834年に、R. モリソンの辞書原稿をその息子ジョンから示される。

1844年 『英華韻府歴階』 Court Dialect (官話) の語彙集

1856年 『英華分韻撮要』 広東方言辞書

1867年 T. F. Wade によって『語言自邇集』の初版が出版される。

1874年 『漢英韻府』が出版される。

1884年 逝去

1889年 増刷

1896年 増刷

1903年 増刷

1909年 改訂版が出版される。

## 2-2. 構成と内容

書名, 出版, 刊年, 冊数, 寸法その他, 日本国内の所蔵者などについては, 飛田・宮田 1997 の目録に詳しく紹介されている。これによると 1874 年に初版が出版されてから, 1889 年, 1896 年版, 1903 年にそれぞれ増刷されており, 刊年を除いては基本的に同じ内容である。さらに 1909 年には改訂版が出版されている<sup>3)</sup>。幾つかの点について, ここでも取りあげておく。まず, 各版の目次について見てみると, 1874 年初版 (1889 年, 1896 年版), 1909 年版の内表紙 (/ は改行を表す) はそれぞれ次の通りである。1909 年版の下線部分は新たに加えられた部分である。

## (1) 1874 年版

同治甲戌年鐫

衛三畏廉士甫編譯

漢英韻府

滬邑美華書院銅板梓行

(英語表紙)

A /SYLLABIC DICTIONARY /OF THE /CHINESE LANGUAGE; /ARRANGED ACCORDING TO THE WU-FANG YUEN YIN, /WITH THE /PRONUNTIATION OF THE CHARACTERS AS HEARD IN PEKING, CANTON, /AMOY, AND SHANGHAI /BY S. WELLS WILLIAMS, LL.D. /取之精而用之宏誠哉斯語茲集諸書大旨以成是書無非期為博雅君子之一助爾 /“Very true it is, that a careful selection of expressions must precede their extensive use / remembering this, and in the hope of affording some aid to scholars, the purport / of many books has been here brought together into one.” / SHANGHAI: / AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS. / 1874

1889 年版, 1896 年版, 1903 年版の増刷はいずれも, 刊年の印刷を除いては初版の 1874 年版と同じである (1881 年, 1883 年にも増刷が行われているということである)。つぎに「北通州協和書院」から出版された 1909 年改訂版を見てみよう。下線部は新たに加わったか, 初版と異なる箇所である。

## (2) 1909 年版

(漢字表紙)

同治甲戌年原鐫 (1874 年のこと)

光緒丙午年再鐫 (1909 年のこと)

美衛三畏廉士甫編譯

華北公理會委辦重訂

漢英韻府

北通州協和書院梓行

(英語表紙)

A /SYLLABIC DICTIONARY /OF THE /CHINESE LANGUAGE /ARRANGED ACCORDING TO  
THE WU-FANG YÜAN YIN, /BY /S. WELLS WILLIAMS, LL.D. /AND /ALPHABETICALLY  
REARRANGED ACCORDING TO THE /ROMANIZATION OF SIR THOMAS F. WADE, /BY A  
COMMITTEE OF THE /NORTH CHINA MISSION OF THE AMERICAN BOARD. /PUBLISHED  
BY THE NORTH CHINA UNION COLLEGE /TUNG CHOU, NEAR PEKING, CHINA. /1909.

つぎに、表紙以下の目次について若干紹介しておく。

(1) 1874年

PREFACE

INTRODUCTION (内容の目次については後述)

Table of Radicals.

辞書本文 (1～1150頁)

List of the Radicals. (1151～1153頁)

A Classification of the Radicals by a Natural Method Like the Following, Will Assist in Rememnering the Leading Groups. (1153頁)

Characters in this Dictionary Arranged by their Radicals. (1154～1239頁)

List of Difficult Characters. (1239～1242頁)

List of the Family Surnames of the Chinese both Single and Double. (1242～1250頁)

さらに以下の正誤表が付く。

Errata in the Large Chinese Characters. (1251頁)

Errata in Chinese Phrases. (1251～1252頁)

1889年、1896年の増刷についても、巻頭、辞書本文、1250頁の List of the Family Surnames of the Chinese both Single and Double. まで1874年初版と全く同じである。なお、「Errata in the Large Chinese Characters., Errata in Chinese Phrases.」が、1889年では本文の若干の修正を経て、「Errata and Corrections.」となっている。この「Errata and Corrections.」には1883年の日付けがある。

(2) 1909年

巻頭に改訂版の序文「PREFACE OF THE REVISED EDITION.」が加わったほかは、「INTRODUCTION」以下、辞書本文より前の部分は同じ内容である。辞書本文は、配列が新

たにウェード式ローマ字表記によって再編成され、また、字の大きさを縮小して3列の配列にするなど変更があったため、ページ数が963頁（964頁白紙）と大幅に縮小しているが、字数、内容には変更がない。巻末部分については、

List of the Radicals.

A Classification of the Radicals by a Natural Method Like the Following, Will Assist in Rememnering the Leading Groups. (965～967頁)

Characters in this Dictionary Arranged by their Radicals. (968～1053頁)

List of Difficult Characters. (1053～1056頁)

の各項目があり、これまでの正誤表はなくなっている。

### 2-3. 本文の体裁とその特徴

つぎにウィリアムズの華英字典の本文の体裁とその特徴について見てみる。以下、特にことわりの無い場合は、1874年初版の内容に拠っている。さらに、初版と改版との異同についても詳しく見ていくことにする。

また、1909年2版では、本文は、各頁は上部にページ数とウェード式ローマ字が示されている。3列に組まれていて、各列に親字、見出し語とそれぞれの説明がある。なお親字、見出し語には特に一つ一つに発音は示されていない。本文の説明部分の体裁は以下の通りである。例えば、1874年初版の「説」についての記述を見てみると、まず「SHWOH<sup>4)</sup>」の冒頭には、

Old sound,shot. In Canton,shut,ut,and shui; — in Swatow,sue and suat;--in Amoy,swat; — in Fuhchau, siok,yok,and swoi; — in Shanghai,suh and sih; — in Chifu,shue and sos.

のように各方言音の一覧が記されている。つづいて、以下のように、各親字と英文による説明、見出し語とその説明がある。

説

Shwo Shui

From words and to exchange.

To talk, to speak; to stir up one by conversing with him; to say, to narrate; to set forth, to discourse upon; a promise; words, speech; sayings,doctrines; to speak for, to excuse.

| 話 to converse; language, speech.

- 解 | to explain words; a coment, an explanation.  
 | 神 | 鬼 to talk of gods and demons; to propound mysteries.  
 | 破 to blab, to divulge.  
 | 文 to explain characters, to tell their component parts.  
 | 夢話 to tell dreams; big stories.  
 談天 | 地 to talk about everything, vague talk.  
 ↓ 不得他 I cannot speak to him ( or about it ).  
 | 知 to state verbally. (以下省略)

見出し語の字は上記のように「|」で表記されている。これはモリソンが採用した方法で、メドハーストがつかわなかったものをウィリアムズが再び採用したものである。ちなみに、ジャイルズはこの方法に批判的でその初版（1892）では次のようになっている。

- 説 1 To speak; to talk; to tell; to say; to scold.  
 説道 to speak; to say  
 不説 not to speak of; not to mention……  
 話説 to talk; to converse.  
 他説甚麼話 what does he say? what language does he speak?  
 他説甚麼話來着 what did he say? (以下省略)

ジャイルズ以前の辞書は例文が少なく、「その英訳も誤りが多い傾向があった（ジャイルズ）」。ジャイルズは「見出し語、例文の多寡が辞書の優劣を決定する<sup>5)</sup>」という考えで、大量の見出し語を掲載しているが、見出しは、語、句、文が入り交じった形になっている。同時期には、ステント (G. C. Stent) による語彙集形式の辞書もあり、こちらもかなり広く使われていたようである。ステントの辞書の体裁は以下の通りである<sup>6)</sup>。

- SHUO1 説 1009b788 to speak, to converse; to scold.  
 shuo1-ch'ang2-tao4-tuan3 説長道短 to criticize failings, gossip.  
 shuo1-ch'i3-lai2 説起來 o speak of, to mention.  
 shuo1-chih1 説知 to inform, to acquaint one.  
 shuo1-ch'ing2 説情 to solicit kindness, to intercede. (以下省略)

親字の後ろの数字「1009b」「788」はそれぞれ、前者がジャイルズ初版（1892）、後者がウィリアムズ初版（1874）の頁数で、三者を相互に参照できるように配慮されている。また、ス

テントの語彙集はほとんどの見出し語が漢字2字から4字と短かめで、さらに全ての見出し語にローマ字が付されている。これはペキン語にかぎった語彙集という性格ゆえであり、これに比べ、ウィリアムズのほうは、「学習者自身が学習している方言音を自分で確認することを意図していた」ので親字以外にはあえて発音表記を付けていないので、学習者が一々調べねばならなくなっている。収録語数は、ステントが親字約4000で、ウィリアムズが総数12527(10940)、ジャイルズ初版では13848字である。

### 3. 字典編纂における特徴

つぎに、ウィリアムズの字典『漢英韻府』の編纂における特徴について、幾つかの点で具体的に見ていきたい。

#### 3-1. 漢字について

漢字数は10940字(総数12527字)である。ウィリアムズは1874年初版の序文の中で、辞書編集にあたっては、「入手可能な先行の類書は全て調査し、なかでもメドハーストの『康熙字典』の翻訳は大いに利用した<sup>7)</sup>」と述べている。先行のモリソンやメドハーストと同じく、ウィリアムズの辞書に収録された漢字の源は4万を超える漢字を収録した『康熙字典』であると言える。パーカー(1896)によると、古典、二十四史、文学を読むためには12000字が必要であり、『康熙字典』の残りの大部分約28000字は廃物である、との認識であった<sup>8)</sup>。ウィリアムズ、ジャイルズはいずれも約12000を収録しており、基本姿勢はパーカーの考えに一致している。とくにジャイルズは、もし中国語で新聞を出版する場合には約6000の文字数があれば十分である、とも述べている。また、ウィリアムズは『漢英韻府』の辞書本文中で、『康熙字典』には無い文字を採用している場合には「unauthorized」と説明している。

#### 3-2. 発音に関して

発音に関しては、411の音節に基づいて配列したモリソンの方法を踏襲せず、『五方元音』を文字配列の基準として、これを「正確に踏襲」したと1874年初版の序文で述べている。モリソンのように新しい配列を考案するよりも、中国固有の音節の配列を採用することが、より容易、かつ安全な方法であったためである。こうして採用された発音は、ウィリアムズの考えるところでは「官話のある特定の地域のものではなく、揚子江以北で聞かれる口頭語の一般的平均により近いもの」であった。この発音を標準とした1つの理由は、学習者自身に「自分の滞在している地域で聞かれる発音と、辞書の標準音との違いに注目させる」ということであり、約53000を超える例文には発音表記をつけず、学習者に自分自身が学んでいる方言音で読ませるようにしている。また、有気音に関して、モリソン以来の辞書ではどう扱っ

ていたかを辿ってみると、モリソン (1819) は、これを示さなかったし、メドハースト (1843) は、示そうとしたが省略や誤りが多かった<sup>9)</sup>。ウィリアムズ (1874) は、「t' i t' i t' i t' i」のように、「'」の記号で有気音を正確に示し、同じ発音のものは無気音、有気音の順で配列している。声調是北京語の声調に依って第1声から順に「ˊ, ˊ, ˊ, ˊ」の記号で表している。つづくジャイルズも有気音を「'」の記号によって正確に表記し、北京語の声調を親字の右上角にアラビア数字で表している。具体的な発音のローマ字表記については次節で触れることにする。

### 3-3. ローマ字による発音表記

『漢英韻府』初版 (1874) の序文によれば522の音節、Introduction の表では526の音節となっているが、実際に辞書本文中では‘AI’から‘YUNG’までの530の音節にしたがって漢字が配列されている。また、各親字の下には Chauncey Goodrich<sup>10)</sup>による北京語の発音表記を併記している。ウィリアムズ初版の7年前、1867年にはウェードの『語言自邇集』が出版されているが、その Appendix III. には The Peking Syllabary と題して420の音節からなる所謂ウェード式ローマ字表記が掲載されている。のちにジャイルズは、まず「自身の辞書が主に領事官向けで、すでにその多くが『語言自邇集』で学んでいること」、そして「北京語を代表とする「Mandarin」「Court language」の表記法として一般に認められた方法である」という理由からこの表記法を採用している。ウィリアムズの辞書に対しても、1879年にアチスンによってウェード式ローマ字表記による索引がつくられている。アチスンの序文によれば「この索引は、その中国語の知識がペキン方言と『語言自邇集』によるものに限られる人によって経験されるウィリアムズの辞書を利用する際の困難さ」を解消するために提案されたということである。さらに、1909年の『漢英韻府』改訂版では、ウィリアムズの表記法は「中国語学習者に使われなくなった」ということで、ウェード式ローマ字にによって再編成された。ウィリアムズの音節数が100以上も多いのは、主に入声に‘H’をつけたものが多数含まれていることが原因である。ジャイルズは\*印で入声に対応しており、ウィリアムズの1909年改訂版でも\*印で対応している。

### 3-4. 方言音について

ウィリアムズは、外国人学習者の要求を満たすためには、声調と文字の様々な発音はもとより、「共通語と方言の発音を掲載すべき<sup>11)</sup>」と考えていた。この考えに基づいて、各音節の先頭には、方言音のリストが掲載されている。例えば、本文中362番目の「SHWOH」の場合では、つぎのように各方言音が紹介されている。

Old sound, shot. In Canton, shut, ut, and shui; — in Swatow, sue and suat; — in Amoy, swat; — in



Fuhchau, siok, yok, and swoi; — in Shanghai, suh and sih; — in Chifu, shue and sos.

(古音は 'shot' 広東 'shut, ut, shui' スワトウ 'sue, suat' アモイ 'swat' 福州 'siok, yok, swoi' 上海 'suh, sih' Chifu 'shue, sos')

これとは別に、方言音については、アチスンによる1879年のウェード式の索引について、1886年にはジョン・ギブソンによってスワトウ方言、1904年には MacIver によって客家方言による索引がそれぞれつくられた。

### 3-5. 説明文、語源と見出し

序文によると例文と例句は約53000超であるが、これには発音表記は付さず、学習者がそれぞれの方言音で読むことを想定している。

説明文については、「1つの中国語に対する英語の正確な同義語を見つけること、特に精神的、宗教的、儀式に関するような抽象語彙を説明すること」は非常に困難であった。

語彙とその説明のうち、自然に関する語彙については『本草綱目』『三才図』『植物名實圖考』、仏教については Eitel の Handbook of Buddhism、医学については E. P. Smith の Materia Medica、Hobson の Medical Vocabulary、口語や方言、文語などその他の分野では、Wade の Category of T' ien、Course of Colloquial Chinese、Edkins の Grammar of the Shanghai Dialect、Progressive Lessons in the Chinese Spoken Language、Legge の Translation of the Chinese Classics などをそれぞれ参照している<sup>12)</sup>。

見出し語中の親字については、モリソンを踏襲して省略記号の「|」を採用している。

また、ジャイルズは説明文に関して、モリソンが『康熙字典』を厳密に複製したものであったので、「もしモリソンを踏襲していれば間違いを犯さなかった」と述べている。そして、『康熙字典』の記述を誤解して間違いを生じたメドハーストをウィリアムズが踏襲した。さらにそれを踏襲したために、ジャイルズ自身も間違いを抱えてしまった、と述懐している。

ここに1例をあげると、『康熙字典』では「狻」を「狻麿如虓猫食虎豹，即獅子也出西域，狻猊野馬走五百里，犬急也」と説明している。メドハーストは「狻」を「Swan, As 狻猊 swan ne, a young lion」, 「狻」を「Swan, A lion, comes from Thibet. 狻猊 swan nrh, a wild horse, that can travel 500 le in a day. Read seun, a swift dog.」とした。ウィリアムズはそれによって「A young lion, called | 狻 it comes from Tibet, and is said to eat tigers; others describe it as a fleet wild horse.」として、チベットにおいて未知であるはずのライオンを「チベットから来たもの」と定義してしまった。このように、先行の著作を参考にする過程で間違いもあわせて受け継いでいってしまったという一面がある。しかし、このような例が幾つかあることも確かだが、例えば「説」の各見出し語を見た場合、メドハーストとウィリアムズに共通するものは僅かに1例しかなく、後者がかなりの程度で前者を踏襲したということは考えにくい。

3-6. Introduction<sup>13)</sup>

『漢英韻府』は序文のあとに“Introduction”が付されている。ここでは、この辞書の内容、守備範囲についての説明、つまり発音表記や文字の構造をはじめとして、つぎの各テーマでウィリアムズの論が展開されている。

- 1) The Mandarin Dialect as Exhibited in the Wu-Fang Yuen Yin.  
……『五方元音』で示されている Mandarin Dialect (官話)
- 2) System of Orthography. ……綴り字法のシステム
- 3) Aspirates. ……帯気音 (有気音) について
- 4) Shing or Tones. ……声調
- 5) Old Sounds of the Chinese Characters. ……漢字の古音
- 6) Range of Dialects. ……方言の範囲
- 7) The Radicals. ……語根 (漢字の部首)
- 8) Primitives. ……語根語

さらに、6) Range of Dialects. にはつぎの3つの付録がついている。

- 1 / Pronunciation of an Extract from the Sacred Commands in Eight Dialects.
- 2 / Translation of the Above Extract.
- 3 / Colloquial Form of the Extract in Seven Dialects.

この“Introduction”については、非常に大きなものであるため、その詳細については今後の課題としておきたい。

## 4. 本文中の付録の表など

ウィリアムズは、さらに、個々の見出し語では十分に説明しきれない百科項目的な事項について、この辞書の本文中に以下の各表を配置している。現在の辞書でいうところの「囲み記事」で、大きくわけて、(I)歴代王朝ならびにその皇帝、首都の一覧と、(II)節季、暦などに関する表現の一覧がある。

## (I) 歴代王朝ならびにその皇帝、首都の一覧

List of the Chinese Dynasties (p33) ……中国の王朝リスト

Emperors of the Sung Dynasty (p831) ……宋朝の皇帝

Emperors of the Mongol Dynasty (p1134) ……元朝の皇帝

Emperors of the Ming Dynasty (p559) ……明朝の皇帝

Emperors of the Manchu Dynasty (p995) ……清朝の皇帝

Personal names of the Manchu Sovereigns (p266) ……満州人の君主の個人名

Kings of the Kingdom of Lu (p556) ……魯国の王

- Names of the tombs of the Ming Sovereigns (p559) ……明朝の皇帝の墓の名前  
 Capitals of China under Different dynasties (p404) ……各王朝の首都  
 (II) 節季、曆などに関する表現の一覧  
 Insignia of Official Rank (p698) ……公式ランク（官位）の記章  
 List of the Twenty-eight Constellations (p824) ……二十八星座のリスト  
 Twelve Horary Characters or Branches (p824) ……十二支  
 Ten Celestial Stems (p974) ……十干  
 The Sexagenary Cycle (p355) ……還曆のサイクル  
 Twenty-four Solar Terms (p974) ……二十四節季  
 Poetical Names of the Month (p1130) ……月の詩的名称  
 Eighteen Provinces and Colonies (p743) ……十八省および植民地  
 List of early Feudal States (p491) 早期の封建国家

## 5. 初版（1874年）から改訂版（1909年）まで

### 5-1. Errata（正誤表）について

ウィリアムズは、印刷までに対処できなかった本文中の誤植を、巻末で一覧にして紹介している。まず、初版では、Errata in the Large Chinese Characters.（親字の正誤表）、ならびに Errata in Chinese Phrases.（見出しの正誤表）があり、前者は「Page 5, col. 3, top, for 窳 read 啖」など24例、後者は「Page 21, col. 1, top, for 比 read 北」など102例である。1889年版では、そのタイトルが Errata and Corrections. になっている。Errata の部分で、親字と見出しの正誤表が1つになっており、20例である。このうち初版での誤りがまだ改まっていないものが親字2例、見出し6例の合計8例である。さらに「Page 309, col. 3, line 17 for 佛 read 拂」など新たに生じた誤植12例が加わっている。Corrections. の部分は、例えば「1482 The 鮒 is a carp; the name includes similar species of soft finned fish, of which some sorts are known as 鯽魚; they are served up at wedding feasts.」など、本文の説明の補充にあたるもので合計107例ある。1909年の改訂版には Errata がない。

### 5-2. ウェード式ローマ字表記の採用

1909年の改訂版では、従来のウィリアムズ独自の表記法からウェード式ローマ字表記に対応するように変更され、入声音には「\*」が付されている。例えば、本文836頁の親字「攢」は「攢」のように記号「ㄨ」と「2」によって表記されている。Mandarin（官話）の声調はそれぞれ以下のようにジャイルズとウィリアムズの表記を踏襲して、「上平 1 ㄨ / 下平 2 ㄨ / 上声 3 ㄨ / 去声 4 ㄨ」のように示されている。つまり、ジャイルズの辞書で

採用されている北京語の声調が、各親字の下にアラビア数字で示され、また併せて、ウィリアムズの声調を表すマークが各親字の4隅に示されている。このように発音表記の面では、ウェード式を中心に相互に補いあう関係になっている。

## 6. モリソン以来の華英辞書の発展

つぎに辞書本文について、モリソン以来の発展をごく大まかに眺めてみよう。まず親字の説明について、例えば「説」の場合は以下の通りである。まずモリソンでは、

Morrison (1819) Read Sho, Shwe, or Shwo. From words and to exchange. To say; to speak; to converse; to narrate; to explain; to teach; words. Speech; discourse; explanation; illustration; statement. Read Shwae, to talk to and persuade. A surname.

となっている。メドハーストでは若干少なくなって、以下のような説明になっている。

Medhurst (1843) Shwo, To explain, to speak, to say, to converse, to relate; to discourse in order; to announce, to tell; to open up; to illustrate, the discourse itself.

ちなみに、『康熙字典』の「説」の部分(抜粋)は、「失熟切、輸熟切、説釋也、述也、序述之也、論也、言也、告也、解也、訓也、所論之辭也、膝口説也、説者悦也、余輟切、弋雪切、欲雪切、憚也、喜也、樂也、服也、又人名、又姓」となっていて、モリソンとメドハーストの両者ともに『康熙字典』に依拠していることがわかる。つづいて、ウィリアムズもまた以下に示すように、先行の両者と同様に『康熙字典』に依拠していることが分かる。

Williams (1874) From words and to exchange. To talk, to speak; to stir up one by conversing with him; to say, to narrate, to set forth, to discourse upon; a promise; words, speech; saying, doctrines; to speak for, to excuse.

この3者に比べて、のちジャイルズの説明は、以下のように大幅に簡潔になっている。

Giles (1892) To speak; to talk; to tell; to say; to scold.

Giles (1912) To speak (see 5017); to talk; to tell; to say; to explain; a disquisition or treatise; to scold. See 11149, 13743.

これは、親字の説明よりも、個々の見出し、例文のほうに重点を置き、「利用者の実用を重

視」したジャイルズの姿勢の現れであろう。基本的に『康熙字典』に依拠してきたウィリアムズまでの姿勢とは明らかに異なるものである。

つぎに、見出し語について見てみると、モリソン、メドハースト、ウィリアムズはそれぞれ以下の通りである。

Morrison (1819) 見出し数11

解説 説知 説人是非 説謊 説得有理 説得支離 説差了 説錯了 説破 説長説短  
説破人

Medhurst (1843) 見出し数15

説話ママ 口説 知其説 不可説 説難 陳説 攻説 説話 解説 民説無疆 心説 成説  
説誘 遊説六國 説駕

Williams (1874) 見出し数28

説話 解説 説神説鬼 説破 説文 説夢話 談天説地 説不得他 説知 沒有得説 説不  
得 有成説 説白清唱 説不了 好説 小説 再説 説反了 難説 不容分説 于子成説  
遊説列國 説客 召伯所説 説于株野 民説無疆 亦既觀止我心則説 説驂而賻

ここでは意外にも3者に共通するものは「解説」1語しかなく、親字の説明とは好対照である。上の各語で、3者が一致するものには囲みを、モリソンとウィリアムズが一致するものには下線を、メドハーストとウィリアムズが一致するものには2重下線を付した。3者あるいは2者で一致した見出し語の説明はそれぞれ以下の通りである（下線は筆者による）。

‘解説’

Morrison (1819) explanation; commentary.

Medhurst (1843) explanation.

Williams (1874) to explain words; a coment, an explanation.

‘説知’

Morrison (1819) to tell ; to state to verbally.

Williams (1874) to state verbally.

‘説破’

Morrison (1819) to divulge, or to tell clearly what is secretly designed.

Williams (1874) to blab, to divulge.

‘説話’

Medhurst (1843) to converse.

Williams (1874) to converse; language, speech.

つぎに、見出し語数の増加について見てみよう。例えば、「説」について見ると、Morrison (1819) の見出し語数を割合「1」とすると、以降、Medhurst (1843), Williams (1874), Giles (1892), Giles (1912) で、「1 → 1.36 → 2.55 → 8.73 → 11.73」という具合に増加していく。ジャイルズ2版の序文の一部「モリソン以降の辞書の発展」に関する項<sup>14)</sup>で紹介された25語（説、山、生、打、石、如、神、酒、道、色、世、文、筆、畫、事、氣、天、眼、物、要、由、陰、應、月、元）の平均では「1 → 1.02 → 1.91 → 6.49 → 8.34」となる。ウィリアムズまでの3者の見出し語とその数についてはさきに示した通りである。のちのジャイルズでは見出し語数が急増し、初版で見出し語数96となり<sup>15)</sup>、さらに2版では「説不上來」など33語が増補されており<sup>16)</sup>、見出し語の総数は129にまでなっている。

## 7. さいごに

ウィリアムズは、ミッションプレスの印刷技術者として来華し、のちにアメリカ在中公使館にて通訳、翻訳の業務で活躍した。まさしく、外交官や海関関係者が中国語研究、字典編纂の分野で台頭した時代のひとである。本稿では、その華英字典とその編纂における方針と幾つかの特徴について見てきた。ウィリアムズによると、当時、中国語学習者数が爆発的に増加した<sup>17)</sup>にも関わらず、辞書類の絶対数が不足し、学習に支障を来していた。それに、学習者たちが当時使っていたのは幾つかの方言字書であった。これらの状況から、音節による配列形式の辞書出版を計画した。その配列の基準となる音節には、いわゆる共通語である官話を選び、より広範な使用を目論み、各方言については、学習者がそれぞれ自習できるようにした。有気音についても、「正確に示した」とジャイルズが評価している。しかし、そういった進歩的な姿勢と同時に、北京語において入声が消滅し、その実用性がなくなったのちも、ローマ字表記において入声音を記号「H」で記録し続けたことが保守主義である、として非難されたりもした。

漢字、説明文の面では、『康熙字典』を源として、説明に重きをおくモリソン、メドハーストの流れにあることは明らかである。のちのジャイルズが親字の説明文を大幅に縮小して、例文を爆発的に増やしたことは対照的である。しかし、見出し語については、意外にもモリソン、メドハーストと一致するものが少ないという印象がある。

また、同時代の辞書や語彙集との関係については、例えば、発音表記の面でウィリアムズの再版（1909）がジャイルズを継承し、ステントの3版（MacGillivray 1898）も、C. Goodrichや、ウィリアムズ、ジャイルズを参照するなど、相互に関係し合っていることが指摘できる。この同時代の類書の相互関係や、モリソン以来の華英辞書発展の歴史の検証という問題についてはさらに範囲を広げて考察することが必要であるが、これについては、今後の課題としておきたい。ウィリアムズの辞書、とくに『漢英韻府』が中国語への本質的な興味によって編纂・出版されただけでなく、中国と欧米の文化接触、とくに言語接触の研究に大きな役割をはたしことは確かである。そして、ウィリアムズが、モリソン以来の各字典の長所と短所を十分に考証したうえでこれを継承し、完成度の高い辞書として仕上げた役割は評価されてしかるべきものであろう。

## 註

- 1) ウィリアムズについては、『近代来華外国人名辞典』『漢訳漢名西洋人名字典』および『漢英韻府』各版の序文などによるが、とくに1867年以前については *Memorials of Protestant Missinaries to the Chinese* に詳細に紹介されている。
- 2) 『漢英韻府』各版の序文参照。
- 3) 飛田・宮田1997の目録によると、1889年、1896年版、1903年に増刷、1909年に改版が出版となっているが、Hutton 2001によると、1883年にも増刷が行われているということである。さらに、Hutton 2001では、ジャイルズが参照したのは1889年の増刷である可能性を指摘している。
- 4) ウィリアムズの発音表記では「H」は入声音を示す。
- 5) いずれも Giles 1892および Giles 1912の序文による。
- 6) 体裁の例については、Macgillivrayの編による *A Chinese and English Vocabulary in the Pekinese Dialect* の再版本を参照した。ステントとその著書、のちの英華・華英辞典との影響関係については那須1993に詳しい。
- 7) 『漢英韻府』初版の序文参照。
- 8) E. H. Parker 1896参照。
- 9) Giles 1892の初版序文参照。
- 10) 本稿では、C. Goodrich 1891 *A Pocket Dictionary, Chinese-English and Pekingese Syllabary* を参照。
- 11) 『漢英韻府』初版の序文参照。さらに、方言音については、Introduction で詳細に言及されているが、これに対する評価については、Hottonz 2001の中で、様々な議論が紹介されている。
- 12) 『漢英韻府』初版の序文参照。
- 13) Introduction については、1909年の改版まで一貫して初版当時のものがそのまま掲載されている。
- 14) ジャイルズ2版（1912）序文の一部 *Comparative Table of Number of Phrases under Various Characters, Taken as Specimens, To Illustrate the Progress of Chinese-English Lexicography*. およびそれにつづく文章で、モリソン以来の華英辞典について簡潔に記されている。
- 15) ジャイルズ初版（1892）の見出し語96例は以下の通りである。

說道 不說 說話 他說甚麼話 他說甚麼話來著 你說話，為甚麼說不透 這個話我說不上 說開 說開價錢 這兩人可說開了話咯 你先去把話說下 人情說不下去 却是說過的話，不好翻悔 說笑話 說說笑笑 說亮話 沒得說／沒有說了／沒有甚麼說的 說不得 說不來 那兩個人說話 說不來 說不了 說出來 說不出 話老說不出來 你說出價兒來 說不清楚 說來說去，你是說

我哪 他說起我沒有 他說得起是財主 對人說 不肯說破 說來，吾丈未必解也 說時遲，那時快 好說，好說 那還好說 難說，難說 說完 說明 說長道短 說冒失 說成了／說定了 俗語兒說的 誰這麼說的 說方便 說白了 說住了 我說得哪 你還說呢 說是那麼說 說得，作不得 說事道錢 說得響亮 說東談西 說歪 說法 說頭 說到 說合 給人家說合 明天再說 說睡語／說夢話／說謔語 說糊語 談天說地 說神說鬼 不容（由）分說 以自說 有說則可，無說則死 我們已有成說 與子成說 說曹操，曹操就到 解說 說知 不必說／不消說了 說反了／說倒了 說聲 說相聲 說書的 說嘴 說慣了嘴 會說的不如會聽的 能說不如能作 小說 邪說 說破嘴不聽 說項 說項生兒 說人 我要說他一頓 說文 不亦說乎 召伯所說 說于桑田 日中而說 遊說列國 故就湯而說之 說客

- 16) ジャイルズ 2 版 (1912) で増補された見出し語は以下の 33 語である。

說不上來 開說 給他說了一說 何曾見說個姓孫的 淺說 無可說的 說得一尺不如行得一寸 說得過去 說得大話便坐頭一位 看不得他說得好 總說不去 說不過 說出個青紅皂白來 說不出者罰一巨觥 油字再說不出口 有一件說一件，有一句說一句 不要說起 說起來 這麼說起來 好說 合用二說 誰說你甚麼來 這是怎麼說 你說的都是甚麼話 你說的是甚麼話呢 說略 他是著別人說我了 不敢妄為臆說 陶說 玉說 兩存其說 時說以月喻貌 叫我說了他一句

- 17) 『漢英韻府』初版の序文によると、当時、外国人の中国語学習者は初期の約 10 倍にまで増加していた。

#### 参考文献・参考資料一覧

欧文については年代順、和文については 50 音順に掲載する。

R.Morrison 1819 A Dictionary of the Chinese Language 五車韻府

W.H. Medhurst 1843 Chinese and English Dictionary

Memorials of Protestant Missinaries to the Chinese : American Presbyterian Misson Press 1867

S.W.Williams 1874, 1889, 1896, 1909 A Syllabic Dictionary of the Chinese Language 漢英韻府(1881, 1883, 1903 年版は未見)

G.C.Stent 1877 A Chinese and English Vocabulary in the Pekinese Dialect 漢英合璧相連字彙

C.Goodrich 1891 A Pocket Dictionary, Chinese-English and Pekingese Syllabary

H.A.Giles 1892, 1912 A Chinese-English Dictionary

E.H.Parker 1896 Notes by E.H.Parker, China Review 22 (2) : 558-60

Macgillivray (Stent) 1898 A Chinese and English Vocabulary in the Pekinese Dialect 漢英合璧相連字彙

F.Hirth 1909 Notes on the Chinese Documentary Style 文件字句入門(2 版)

Hutton, Christopher 2001 The Search for a Total Dictionary of Chinese : Samuel Wells Williams' Syllabic Dictionary (1874)

伊地智善繼 1957 「英語による中国語字典」『中国語学事典 3』所収 江南書院

内田慶市 2001 『近代における東西言語文化接触の研究』 関西大学出版部

沈国威 1994 『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容—』 笠間書院

那須雅之 1993 「G. C. Stent とその著書について」『中国語学』240 号

飛田良文・宮田和子 1997 「十九世紀の英華・華英辞典目録—翻訳語研究の資料として—」『近代語研究 6』 明治書院

中国社会科学院 1981 『近代来華外国人名辞典』

天理大学出版部 1964 『漢訳漢名西洋人名字典』